

太宰治「駈込み訴へ」再論

—「私」と「あの人」の造型をめぐる—

三 谷 憲 正

- 一 はじめに
- 二 先行研究を中心として
- 三 「私」とは何者か
- 四 「あの人」とは誰か
- 五 「燈籠」との関連
- 六 《リアリズム》と《ロマンチズム》と
- 七 日本化された風景
- 八 おわりに

この作品における先行研究は、登場人物の造型という本稿における関心の在り方からは、ほぼ三通りの見解に分かれる。問題となる論点はほとんど提出されてきたかのような感がないわけではない。が、しかし、登場人物の造型をその言説の指し示すとおりに読むと《火の性》のユダと《水の性》のイエスという対照的な在り方が見て取れる。また、構成の面から言えば、「燈籠」が「駈込み訴へ」の前駆をなす原型なのではないかという考えを提起した。ユダがなぜイエスを売るに至ったかは、《火》と《水》の相性の悪さゆえであり、《ロマンチズム》と《リアリズム》はやはり、解け合うことがないのではないか、という疑いからである。そしてそこには、明瞭な顔立ちをした土着的な日本の風土が展開していると思われる。

一、はじめに

太宰治の「駄込み訴へ」については、以前に一度考えてみたことがある。そこでの結論は以下のごとくであった。

一、「駄込み訴へ」という題は江戸時代の法制用語で、正規の手続きを経ずになされる緊急の「訴え」を意味していた。

二、太宰の語る「ユダ物語」の骨格は「ヨハネ伝」を主軸に展開している。

三、しかし、その発想の跳躍台には「聖書知識」が影をおとしている。

以上であるが、その際には、典拠との対比をめぐっての基礎的な作業を中心としたため、作品世界の開示にまで至らなかった。そこで、今回は主としてテキスト内部の問題、とりわけ「私（ユダ）」と「あの人（イエス）」の造型について言及してみたい。

二、先行研究を中心として

二人の人物の造型について考えるとはいえ、「駄込み訴へ」に関してはこれまでも、数多くの論及がなされている。「駄込み訴へ」において本格的な研究が始まるのは、昭和四十年代半ばからのようである。まず、山内祥史氏の

「駄込み訴へ」の書誌⁽²⁾がその基礎固めを開始したのが昭和四十五年である。それ以降、魅力ある作品のためか、数多くの研究が発表されてきている。これらを概観してみると、登場人物の造型という本稿における関心の在り方からは、ほぼ三通りの見解に分かれるように思われる⁽³⁾。

第一はイエスとユダが対立するという見方である。同時代評も視野に入れるならば、林房雄氏の「新人の世界——文芸時評⁽⁴⁾」が、

・神と悪魔、超人と猿——この両極の間を永遠にふらつく「我らの魂」を、太宰治は「駄込み訴へ」の中で、まことに見事に描いてくれた。

と二極の対立として捉えている。

こうした読み方を受け止めるかのように、渡部芳紀氏は「駄込み訴へ」論⁽⁵⁾において、

・キリストの「美しさ」は、「精神家」の美しさであり、理想主義者の美しさである。

・ユダは現実主義者であり、現世における生活を大事にして生きて行こうとしている生活者である。

・いわゆる前期（昭八〜十二）の太宰の姿が前者に、中期（昭和十三年末〜）の太宰の姿が後者に投影している。

と把握している。

こうした見解を引き継ぐ形で、田中良彦氏の『太宰治と「聖書知識」』の「太宰治と山岸外史」の章がある。

・「駄込み訴へ」は理想を追い求めた前期の生き方をあきらめ、現実と妥協しつつ生きるという中期の生き方をしようとする太宰の気持ちがあらわれているとされる。太宰はそれを理想主義者イエスが現実主義者ユダに裏切られることでえがこうとしたのである。主題を成立させるイエス＝理想主義者、ユダ＝現実主義者という見方は「人間キリスト記」によっている。

山岸外史著『人間キリスト記』との詳細な対比を行つての結論である。が、両者の対立という構図はいいのだが、果たして作者太宰の「前期・中期」の姿勢がここに反映しているのかどうか、は検討の余地があるように思われる。

それはともあれ、「太宰のユダが、むしろ徹底したリアリストである」という見解は菊田義孝氏の「ユダの心——『駄込み訴へ』と山岸外史著『人間キリスト記』」にも見て取ることができる。

二つ目の把握はユダが「リアリスト」どころか、実は「理想家」なのではないか、という指摘である。山田晃氏の「論語・聖書・愛——『駄込み訴へ』雑記——」は、

・ユダが人一倍金銭を稼ぐからといって、時になにがし

かの浪費を惜しむ気持を見せたからといって、それらがひとえに愛するイエスのためを思つてのことである以上、ユダを打算家だの現実家だのといつて貶めるのは、お門違いというものでしょう。

と言う。つまりユダは、単なる「打算家」でもなければ「現実家」でもないと言うのである。

・イエスに対するユダの愛は、捨てる愛であり、与えず愛であることにおいて、ほとんど聖なる愛であります。

とこれまでの解釈を転換したユダ像を取り出して見せた。

このような観点を受けるかのように、山口浩行氏は「『駄込み訴へ』試論」で、ユダは自分の「夢想家的資質」に気がつかなかつたのであり、「いわゆる世間智に長けた現実主義者とは考えられない」とし、次のように述べている。

・「あの人」はいわばユダの内面の愛、理想の投影に過ぎないのではないのか。お眼鏡にかなつた一種の美しい芸術品としてユダに捉えられているとも言えよう。両者の関係は、「趣味家」とその嗜好物の関係に近いのである。

つまり、ユダの「高い趣味家」としての側面を出した見方を提示しているのである。

三番目には、対立かどうかよりも、語り手ユダの心中の問題として考えるべきではないか、という読み方である。

例えば、玉置邦雄氏は「『駄込み訴へ』の世界——イエスの逆説的な愛の証し」¹⁰の中で、次のように述べている。

・救いたいような精神の暗い翳の中のたうちまわり、心を病み、錯乱していくユダの形象を通して、太宰は逆説的にキリストの愛とその優しさを語ろうとしていることを確かめる必要がある。弱者の論理とでも言うべき思念を担ったユダの存在の意味である。

ユダとイエス是对立するものではなく、むしろユダはイエスを補完する役割を「逆説的」に果たしているという見方である。この中で、氏はユダの「罪」に触れ、

・限りなく純粹な愛と憎しみに引き裂かれるユダが、キリストを「人の子」として理解していること、それが人間ユダの救いたい罪なのである。

という見解を示している点は興味がもたれる。おそらくは、イエスという存在にエロスの関わろうとするユダと、イエスの説く「愛」の相異に重要な因子が潜んでいるのではないか、という見解である。

また、この作品は、対立や抗争の客観的な物語ではなく、あくまでユダの主観の独白上に展開する、内的な葛藤の物語なのだ、とする磯貝英夫氏の「饒舌——両極思考

——『駄込み訴へ』を視座として——」¹¹もある。

このような把握はその後、高橋英夫氏の「ユダ的テーマの系譜」¹²でも現されている。

・『駄込み訴へ』のユダは、信仰を、イエスの説く神学的未来を理解できないままに、イエスという人間を無限に、無償の愛で愛している人物として描かれている。そう受取れば、二人の対比は、信仰への愛（イエス）と人間への愛（ユダ）の対立として意味づけることは不可能ではない。

この見方は、近年にも持ち越され、ユダが生活者の現実家か愛の理想家かはそれほど対立はしないのではないかとする奥野政元氏の「『駄込み訴へ』ノート」¹³は、

・すなわち悪魔とは、このようにしてイエスを人間的に自分のうちに捉え愛しようとする場所で、立ち現れるのだということである。ユダはイエスを売ったから悪魔に手を貸したわけではない。むしろどこまでも人間として愛したから悪魔に魅いられたのだと太宰は言うのであろう。

と述べている。確かにそのような一面を有している作品でもあると思われる。

無論、上記以外にも、「エロス」と「性格の喜悲劇」に着目すれば、佐藤泰正氏の「『駄込み訴へ』と『西方の

人」¹⁴があり、

・ユダとイエスの両者の間に纏綿するものは、(…)エロスの側面であり、現実家ユダの眼に映るイエスは「精神家」として描かれる。言わばドラマは、よりなまましく卑小な「性格の喜悲劇」(『お伽草紙』)であり、情念の劇となる。(傍点原文のママ)という指摘がある。

また、高橋清隆氏の「太宰治『駄込み訴へ』と聖書」¹⁵は、各福音書と「駄込み訴へ」を対照させ、典拠に迫った貴重な論文であり、教示される面が多い。が、
・太宰は、神への愛、神の国の建設ということには全く関心を示さない。太宰の眼目は、あくまでも、人と人との愛であった。太宰において、「汝の隣人を愛せよ」という愛の思想は、完全に、神の国の実現とは切り離されている。

というのは、どうであろうか。確かにユダにとってはこのようであつただろう。が、果たして作者太宰がこうであつたかどうか、は必ずしも同次元には論じられないように思うのだが。

以上は本稿の趣旨に基づいた視点からの整理である。概観して思うのは、問題となる論点はほとんど提出されてき

たかのような感がないわけではない。が、しかし、ユダによつて語られる登場人物の造型を一度単語レベルに引き下げて、その言説の指し示すとおりに読むというなら変哲のない試みの余地が、奇妙なことに幾ばくかは残されているようにも思われる。以下はその試みである。

三、「私」とは何者か

「駄込み訴へ」の「私」ユダは、一般的に裏切り者として位置づけられるが、しかし奇妙に魅力的な人物であることもまた事実である。一体その魅力はどこから来るのだろうか。多分この人物は、単に冷ややかに物事を眺める質の男ではなく、むしろ「感情豊かで熱し易い性質」を持ってゐるように思われる。例えば、「泣く」という語に着目してみると、次のようなフレーズが各所にちりばめられているのが判る。

例えば、「春の海辺」で「あの人」が声を掛けてくれた際、「私はそれを聞いて、なぜだか声出して泣きたくな」るのである。また、訴え出ている「旦那さま」に対して、話の途中「泣いたりしてお恥づかしう思ひます。はい、もう泣きませぬ。」と涙を流すユダがいる。あるいは、エルサレムに入城し、群衆の歓呼に感激する他の弟子たちを見てゐるうちに、「不覚にも、目がしらが熱くなつて来」

てもいる。

そのような中で私たちを強く引きつける「泣」は、イエスの「洗足」の場面である。

・あの人は自分の逃れ難い運命を知つてゐたのだ。その有様を見てゐるうちに、私は、突然、強力な嗚咽が喉につき上げて来るのを覚えた。矢庭にあの人を抱きしめ、共に泣きたく思ひました。おう可哀想に、あなたを罪してなるものか。

見て取れるように、ユダという人物の感情量は少なくない。単なる冷やかな計算高い「商人」ではない。続くエピソードにも「心の底からの愛の言葉」が「胸に沸きかへ」り、「涙」が登場している。

・けふまで感じたことの無かつた一種崇高な靈感に打たれ、熱いお詫びの涙が氣持よく頬を伝つて流れて、やがてあの人は私の足をも静かに、ていねいに洗つて下され、腰にまといつて在った手巾で柔かく拭いて、ああ、そのときの感触は。さうだ、私はあのとき、天国を見たのかも知れない。

このような言説から判断できるのは、この人物は実におびただしく「泣く」男である、ということである。特にこうした箇所に伴う「熱い」という語句から推測されるのは、彼が「感情豊か」であるのみならず、大変「熱し易い性

質」を帯びて造型されていることである。

この「洗足」の一節は、おそらく、「ベタニヤのシモンの家」でマリヤがイエスの足を香油で拭う場面と対応しているはずであるが、その「香油事件」におけるユダは、また大変怒りっぽい人間でもあるようなのだ。例えば、ユダは次のように彼女を叱る。

・（…）まことに異様な風景でありましたので、私は、なんだか無性に腹が立つて来て、失礼なことをするな！ と、その妹娘に怒鳴つてやりました。

・無駄なことをしては困るね、と私は、さんざ叱つてやりました。

ここからは本氣になつて怒っている人物像が浮かんてくる。私たちが無意識に前提としている暗く冷たい「裏切り者」という感触からはだいぶ遠いイメージがあるのではないか。このことは「旦那さま」への生の訴えにも出て来ている。

・さうだ、私は口惜しいのです。（…）地団太踏むほど無念なのです。

・だけれども、私は、口惜しいのです。胸を掻きむしりたいほど、口惜しいのです。

つまり、こうした箇所から読み取れるのは、「軀込み訴へ」のユダとは、どうも冷徹で冷酷な男であるとは思えない、ということである。こうした彼の怒りを最もよく指し

示しているのが「洗足」の場面における次の一節である。

・言へない。何も言へない。あの人から、さう言はれてみれば、私はやはり潔くなつてゐないのかも知れないと氣弱く肯定する僻んだ氣持が頭をもたげ、とみるみるその卑屈の反省が、醜く、黒くふくれあがり、私の五臓六腑を駆けめぐつて、逆にむらむら憤怒の念が炎を挙げて噴出したのだ。

確かに「氣弱」い一面もあるにはあるが、しかし、ここで語られているユダの「憤怒の念」の「炎」は凄まじい。あたかも鉄板に熱せられて「ふくらし粉」が見えているうちにたちまち膨脹を始めるかのような印象を与える一節である。

以上のようにユダの造型をたどつて改めて考えてみると、先に提起したように、彼は「感情量が豊か」な人物であることが判ってくる。のみならず、「目がしらが熱く」なったり、「熱いお詫びの涙」を流したり、また「憤怒の念が炎を挙げて噴出」したりしている。特に「炎」に着目すると、「熱し易い」性質であることが判る。つまり、ユダとは《火の性》を持った人間なのだと把握することができさうである。

四、「あの人」とは誰か

前節では、ユダが《火の性》を持った人間なのではない

かと捉えたが、では一方の「あの人」イエスとはどのような人物なのであろうか。その一端を示しているのが「春の海辺」でユダと話している折りのイエスの表情である。

・さう私が言つたら、あの方は、薄くお笑ひになり、「シモンやペテロは漁人だ。美しい桃の畠も無い。ヤコブもヨハネも赤貧の漁人だ。あの一とたちには、そんな、一生を安樂に暮せるやうな土地が、どこにも無いのだ。」と低く独りごとのやうに呟いて、また静かに歩きつづけたのですが、後にもさきにも、あの人と、しみみりお話できたのは、そのとき一度だけで、あとは、決して私に打ち解けて下さつたことが無かつた。

ここでの「薄」い「笑ひ」は、微笑とは違ふ次元のものようであり、どこかしら妙に冷ややかに感じられる。それは確かに、「低く独りごとのやうに呟く」言い方やその後「静かに歩きつづける」所作から来ているのかもしれないが、しかしこのことは次のような在り方と深く関わっているらしいのだ。それは、イエスがマリヤの「香油」の一件をとりなした時のことである。

・「……」必ず、この女の今日の仕草も記念として語り伝えられるであらう。」さう言ひ結んだ時に、あの人
の青白い頬は幾分、上氣して赤くなつてゐました。

つまり彼イエスは普段は「青白い頬」をしているのである。さらに、次のようにユダは「あの人」の像を語っている。

・あの人はいままで、どんなに女に好かれても、いつでも美しく、水のやうに静かであつた。いささかも取り乱すことが無かつたのだ。

ここで注目してみたいのは、「水のやうに静か」だつたというイエスについてである。

ところで、なぜイエスはマリヤに「特殊な愛」を感じたのであろうか。このような共感や共鳴はどこから来たのだろうか。おそらくその秘密もマリヤの造型にあるように思われる。

・マルタの妹のマリヤは、姉のマルタが骨組頑丈で牛のやうに大きく、気象も荒く、どたばた立ち働くのだけが取柄で、なんの見どころも無い百姓女であります、あれは違つて骨も細く、皮膚は透きとほる程の青白さで、手足もふつくらして小さく、湖水のやうに深く澄んだ大きい眼が、いつも夢みるやうに、うつとり遠くを眺めてゐて、あの村では皆、不思議がつてゐるほどの気高い娘でありました。

傍線部に注目してみると、あたかも先に見たイエスその人であるかのような形容が使われているのに気づく。肌は「透きとほる程の青白さ」であり、眼は「湖水のやうに深

く澄ん」でいる。改めて確認すれば、「青白い」イエスと「透きとほる程の青白さ」をしたマリヤ、そして「水」のようなイエスと「湖水」のようなマリヤ、とである。二人にはこのような共通性が見て取れる。多分、こうした類似は彼らが地上的な存在ではなく、「遠くを眺め」る人物像として造型されていることから生じている。

ここで、ユダと対照させて見るとその違いが顕著になつて現れてくる。すなわち、『火の性』のユダと『水の性』のイエスである。これは彼らの人物像を一旦抽象化した上で、対比させているのではない。事実、作品中にも明示されている在り方なのだ。

・火と水と。永遠に解け合ふことの無い宿命が、私とあいつとの間に在るのだ。

従来、この一節をすれ違ふ「宿命」を現すもの、として理解して来たようである。それは確かなことなのだが、しかし、概括的な〈意味〉としてではなく、個別・具体的な〈表現〉を集約するキーノートとして理解すべき箇所のように思われる。

多分、太宰は、イエスを「水」という喩で把握していたようである。それは例えば次のような一節からも窺うことができる。

・水の火よりも動きを知れ。キリストの嫋々の威厳をこ

そ学べ。〔HUMAN LOST〕昭二・四〔新潮〕

このように考えてくると、「駆込み訴へ」におけるユダとイエスはやはり、対比的な人物像として措定されていると言えよう。

五、「燈籠」との関連

さて、このように《火の性》のユダと《水の性》のイエスと、対照的な在り方を見て来たが、ここでは他の作品、特に「燈籠」との関わりを考えてみたい。

「燈籠」は「駆込み訴へ」よりも一年半ほど前の昭和二年一〇月、『若草』に発表された作品であり、「五つも年下の商業学校の生徒」に恋をしてしまった「下駄屋のさき子」の話である。

・水野さんとは、ことしの春、私が左の眼をわづらつて、ちかくの眼医者へ通つて、その病院の待合室で、知り合ひになつたのでございます。私は、ひとめで人を好きになつてしまふたちの女でございます。やはり私と同じやうに左の眼に白い眼帯をかけ、不快げに眉をひそめて小さい辞書のペエジをあちこち繰つてしらべて居られる御様子は、たいへんお可哀さうに見えました。私もまた、眼帯のために、うつうつ気が鬱して、待合室の窓からそとの椎の若葉を眺めてみて、椎の若葉

がひどい陽炎かげろふに包まれてめらめら青く燃えあがつてゐるやうに見え、外界のものがすべて、遠いお伽噺おとぎばなしの国の中に在るやうに思はれ、水野さんのお顔が、あんなにこの世のものならず美しく貴く感じられたのも、きつと、あの、私の眼帯の魔法が手伝つてゐたと存じます。

眼科の待合室で、初めて会つた少年をさき子は「たいへんお可哀さう」に感じる。漱石の『三四郎』ではないが、「Pity's akin to love」(四)を思わせる一節である。この時彼女は「美しく貴い」ものを水野に見る。

海水着がなく、水野が困っている(と彼女が一方的に考えた)状況を見かねて彼女は万引きをしよう。しかし直ぐに捕まり、交番でさき子は巡査に向つてせつせつと訴える。

・水野さんは、立派なかたです。いまに、きつと、お偉くなるおかたなのです。それは、私に、わかつて居ります。私は、あのおかたに恥をかかせたくなかつたのです。お友達と海へ行く約束があつたのです。人並の仕度をさせて、海へやらうと思つたんだ、それがなぜ悪いことなのです。私は、ばかです。ばかなんだけれど、それでも、私は立派に水野さんを仕立ててごらんにいれます。あのおかたは、上品な生れの人なのです。

他の人とは、ちがふのです。私は、どうなつてもいいんだ、あのひとさへ、立派に世の中へでられたら、それでもう、私はいいんだ、私には仕事があるのです。

ここで注目してみたいのは、水野を「あのおかた」「あのひと」といい、「上品な生れの人」と語り、先の引用にもあつたように「美しく貴く感じられた」と言っている点である。そして、ここには、世話をするさき子と世話をやかれる水野という関係も存在している点である。

しかし、彼女の行為は結局「あだ花」にしかならない。その後、水野から絶縁を思わせる手紙がやってくる。

・先日、友人とともに海水浴に行き、海浜にて人間の向上心の必要について、ながいこと論じ合つた。僕たちは、いまに偉くなるだらう。さき子さんも、以後は行ひをつつしめ、犯した罪の万分の一にても償ひ、深く社会に陳謝するやう、社会の人、その罪を憎みて、その人を憎まず。水野三郎。(読後かならず焼却のこと。封筒もともに焼却して下さい。必ず。)

さき子の思惑とは無関係に水野は海水浴に行き、そこで「人間の向上心」について友人と話をしている。¹⁹ そもそもさき子の万引きは水野ゆえに引き起こしたものであつたはずなのだが、そのことに「上品な生れの人」であり、「美しく貴く感じられた」彼は全く注意を払わない。最後には、

封筒さえも焼却してほしいというものであつた。

以上、長々と「燈籠」にこだわつたのは、実はこの作品が「駄込み訴へ」の原型なのではないか、という推測の故である。「駄込み訴へ」のイエスはここにおいては水野が果たしている。改めてイエスの造型を確認すると次のようになされているのがわかる。

・美しい人

・あの人には美しい人なのだ

・あの人のお美しさだけは信じてゐる。あんな美しい人はこの世に無い。

・あなたは、いつでも光るばかりに美しかつた。

あるいは、「優美なあの人」とも言われ、その「美しさ」が強調されていた。また水野も「美しく貴く感じら」れる「上品な生れの人」とされている。そして、先に触れた「お可哀さう」という受け取り方も、「駄込み訴へ」の〈洗足〉の場面において、「おう可哀想に、あなたを罪してなるものか。」と言うユダと相似たものがある。さらに「あの一と」といういわゆる遠称をとって表わされている点も同様である。²⁰

さき子は「人並の仕度をさせ」「立派に水野さんを仕立て」、そして「あの一とさへ、立派に世の中へでられたら」という強く熱い思いがあり、それを彼女は「私には仕

事があるのです」と言っている。同じように、ユダもやはり、イエスの世話を一手に引き受ける。

・宿舎の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとはずしてあげてゐたのにあの人はもとより弟子の馬鹿どもまで、私に一言のお礼も言はない。

・私はあの人や弟子たちのパンのお世話を申し、日々の飢渴から救つてあげてゐるのに、どうして私を、あんなに意地悪く軽蔑するのでせう。

しかし、イエスは、かえつて逆にとつてゐるのだとユダは言う。

・私などから世話を受けてゐる、といふことを、何かご自身の、ひどい引目^{ひきめ}でもあるかのやうに思ひ込んでゐなさるのです。

こうして、ユダの努力は逆に「へあだ」となるのであるが、この点も「燈籠」のさき子とさほど変らないすれ違いが生じてゐる。つまり、両作品とも、何者かに尽くして尽くして、最後には捨てられる物語なのである。

「駄込み訴へ」のイエスが《水の性》であると先に述べたが、この「燈籠」で彼女の愛する男の名前が「水野」と名付けられてゐるのは、単なる偶合であらうか。

六、《リアリズム》と《ロマンチズム》と

前節では「燈籠」が「駄込み訴へ」の前駆をなす原型なのではないかという点について考えてみた。おそらく、「まるで狐につかれたやうにとめどもなく、おしやべりがはじまつて、なんだか狂つてゐたやうにも思はれ」る「燈籠」における女主人公さき子を、「夕闇の道をひた走りに走り」「さうして急ぎ、このとほり訴へ申し上げ」る男に変えると「駄込み訴へ」のユダになるのだと思われる。

しかし、「燈籠」においては両者の関係が、「駄込み訴へ」ほど明瞭な造型の差異を現してはいないようである。では、「下駄屋」の娘さき子と「商業学校の生徒」水野が如何にして、ユダとイエスにその意匠を変えるのか。その問いの中には、改めて「駄込み訴へ」中のユダ像とイエス像を検討しなければならないという作業が含まれてゐるようである。

すでに、「火の性」のユダと《水の性》のイエスという対比を述べたが、ここで再度それぞれの人物造型を辿つてみたい。先ず、ユダとはどういう背景を持った人間だったのか。彼は「貧しい商人」「けちな商人」とは卑下してゐるものの、

・「私の村には、まだ私の小さい家が残つて在ります。

年老いた父も母も居ります。ずるぶん広い桃畠もあります。」

と言ひ、さらには

・才能ある、家も畠もある立派な青年です。

・私の特権全部を捨てて来たのです。

と、その出自に関して述べている。ここに描き出されているのは小地主層あるいは自営農階層出身の、青年の姿である。

さらに、彼は知識階級に属する人物でもあるようだ。例えば、

・私は、ひとの恥辱となるやうな感情を嗅ぎわけるのが、生れつき巧みな男であります。自分でもそれを下品な臭覚だと思ひ、いやでありますが、ちらと一目見ただけで、人の弱点を、あやまらず見届けてしまふ鋭敏の才能を持つて居ります。

このようなあたかも近代の知識人を思わせる性質をユダは負っている。このことは、他の弟子たちを彼がどう位置づけているかを見れば逆にはつきりする。

・無能でとんまの弟子たち・痴の集り・馬鹿な奴ら・弟子の馬鹿ども・くだらない弟子たち・馬鹿な弟子ども・さもない根性・そのほか全部の弟子共は、馬鹿なやつ・さすが愚直の弟子たちも・いまは、無智な頑迷

な弟子たちにさへ縋りつきたい気持ち

等々である。つまりここで、ユダ以外の他の弟子たちは彼からみると「馬鹿」そのものでしかなかったのだ。この理解は何も「駈込み訴へ」だけに限らない。やや後になるが、「誰」（昭一六・一二）「知性」において、「マルコ伝」の八章第二七節を引用して次のように言っている。

・たいへん危いところである。イエスは其の苦悩の果に、自己を見失ひ、不安のあまり無智文盲の弟子たちに向ひ「私は誰です」といふ異状な質問を発してゐるのである。無智文盲の弟子たちの答一つに頼らうとしてゐるのである。けれども、ペテロは信じてゐた。愚直に信じてゐた。イエスが神の子である事を信じてゐた。だから平気で答へた。イエスは、弟子たちに教へられ、いよいよ深く御自身の宿命を知つた。

ここの「無智文盲」や「愚直」という語は「駈込み訴へ」でも使われていたものであった。また、「駈込み訴へ」中マリヤに対して、「無智な百姓女ふぜい」「無学の百姓女」と再度に互ひ、「無智・無学」と強調している。こうした点は語り手の位置、すなわち彼が有識者階層に属するという位置を示していると言つてよいであらう。

このように有識者でもあるその内面には「高い趣味家」が宿っている。

・私はもともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家といふものを理解してゐると思つてゐます。

と言う彼が、「あの人」イエスを「純粹に愛してゐる」のは間違ひないことだ。煩を厭わずにそのタームを拾つていけば次のようになる。

・あなたを愛してゐます。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛してゐたつて、それとは較べものにならないほどに愛してゐます。誰よりも愛してゐます。

・あの人のお美しさだけは信じてゐる。あんな美しい人は、この世に無い。私はあの人のお美しさを、純粹に愛してゐる。それだけだ。私は、なんの報酬も考へてゐない。

・あの方は、私の此の無報酬の、純粹の愛情を、どうして受け取つてくださらぬのか。

・命を捨てゐるほどの思ひであの人を慕ひ、けふまでつき随つてきたのに、

・あの人を、一ばん愛してゐるのは私だ。

・これまで一途に愛して來た私自身の愚かさ

このように綿々と語られるユダの「あの人」への「愛」は《火の性》を持つ人間にふさわしく、熱烈なるものがある。そのような中で最も適確に彼の「愛」を示しているのは次の一節である。

・あの方は、どうせ死ぬのだ。ほかの人の手で、下役た

ちに引き渡すよりは、私が、それを為さう。けふまで私の、あの人に捧げた一すじなる愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義務です。私があの人を売つてやる。

つらい立場だ。誰がこの私のひたむきの愛の行為を、正當に理解してくれることか。いや、誰にも理解されなくてもいいのだ。私の愛は、純粹の愛だ。人に理解してもらふ為の愛では無い。そんなさもしい愛では無いのだ。私は永遠に、人の憎しみを買ふだらう。けれども、この純粹の愛の貪欲のまへには、どんな刑罰も、どんな地獄の業火も問題ではない。私は私の生き方を生き抜く。

かつての鎌倉の世の武士をどこかしら思わせるかのようなユダの思考である。「一すじ」といい「ひたむき」といい、確かに彼の「愛」は「純粹」である、「無報酬」という意味においては。このような側面に力点を掛ければ、本稿の「二」で見た先行研究のうち、ユダが「愛の理想家」（山田晃氏）であり、「夢想家」（山口浩行氏）であつたという理解ももうなずける。

しかし、ユダという魅力ある人物は複雑である。おそらくユダという存在の悲劇性は、あたかも《万力》のように両側からの強い力によつて締め上げられていくところにあるように思われる。一つの力は「高い趣味家」であり、

「精神家といふものを理解」してしまふゆゑに美しい「あの人」を「無報酬の、純粹の愛情」をもつて愛してしまふだが、もう一方の力は、彼が現実というものをよく知っていることである。

・世の中はそんなものぢや無いんだ。この世に暮して行くからには、どうしても誰かに、ぺこぺこ頭を下げなければいけないのだし、さうして歩一歩、苦労して人を抑へてゆくより他に仕様が無いのだ。

・私は今の、此の、現世の喜びだけを信じる。

この作品中でユダの口にする「世の中」「この世」という語は確かにこの人物が「現世」においての存在であることを明示している。実際、この世に生活していく上においてユダが述べている言を否定することはできない。現実を見据えるユダには、「あの人」がいかに危うい基盤の上に立っているかが判つていたようである。ユダの見る「あの人」は次のように言われている。

・あの人には傲慢だ。

・あの方は、阿呆なくらゐに自惚れ屋だ。

・私から見れば青二才だ。

そして、エルサレム入城直後の商人たちを追ひ出す「乱暴」に対して、「幼い強がり」といい、「あの人」を「気取り屋の坊ちゃん」とまで言っている。こうした中で、ユダ

が「あの人」を如何に見ていたかを示しているのが次の一文である。

・おのれを高うする者は卑^ひうせられ、おのれを卑^ひうする者は高うせられると、あの方は約束なさつたが、世の中、そんなに甘くいつてたまるものか。あの方は嘘^{うそ}つきだ。言ふこと言ふこと、一から十まで出鱈目だ。

世の中で暮らすにおいては「誰かに、ぺこぺこ頭を下げなければいけない」というユダの現実認識とは、ちょうど逆のことをイエスが言っている点に注目される。現世において「おのれを卑^ひうくしていたら、たちまちのうちに脱落していくしかない。当然、ユダにはそのようなイエスの言葉は「嘘」であり「出鱈目」であり、結局のところ「甘」いものでしかない。ユダの見抜いた「世の中」を否定することは難しい。

おそらく、こうした点に重心を置けば、先行研究が指摘しているように、ユダが「現実主義者」（渡部芳紀氏）であり、「リアリスト」（菊田義孝氏）であるという位置づけもまた充分説得力があるはずである。

すなわち、ユダに働く力は二つあり、一方は高尚な「趣味」を持ち、生活を考慮しない「精神家」を理解し愛してしまふ力である。もう一つはすぐれた現実感覚を持ち、「衣食・宿舎」の世話のできる事務能力をも合わせ持った

「才能ある」人物であるということである。ユダがどちらか一方しかなければ、なんら悲劇は起こらなかったかもしれない。生活者としての視点から見れば「あの人」など単なる世間知らずの「青二才」の「坊ちゃん」ではない。

しかし、「趣味」のみを有し、現実的な能力がもし欠落していたとしたら、ユダの「あの人」への批判は生じるはずもなく、おそらくは「あの人」からの「意地悪さ」も無かつたように思われる。従つて、先行研究の「リアリスト」か「愛の理想家」か、という分け方はその一方に比重を掛けた見方のように思われる。なぜなら、その両方を合わせ持った存在としてユダはあるのだから。

以上見てきたように、ユダという人物は、小地主層あるいは自営農階層出身の青年であり、有識者階層に属し、「精神家」を理解できる「趣味」を持った、現実感覚のすぐれた生活者（リアリスト）、ということになるではなからうか。

しかし、一方の「あの人」は単なる世間知らずの「坊ちゃん」というだけではない。イエスにもまた別の側面があるのである。

・私から見れば、子供のやうに慾が無く、私が日々のパンを得るために、お金をせつせと貯めたつても、すぐ

にそれを一厘残さず、むだな事に使はせてしまつて。けれども私は、それを恨みに思ひません。あの方は美しい人なのだ。

「子供のやうに慾が無く、金にも縁なく、生活能力もない。もしユダがいなければ「その日のパンにも困つてゐて」「みんな飢ゑ死にしまふだけ」である。あたかも数学における「点」の定義のように、観念的な存在としてのみあればよく、現実的な姿も形もいらないのであるうか。

・あの方は、私のこんな隠れた日々の苦勞をも知らぬ振りして、いつでも大変な贅沢を言ひ、五つのパンと魚が二つ在るきりの時でさへ、目前の大群集みなに食物を与へよ、などと無理難題を言ひつけなかつて、私は陰で実に苦しいやり繰りをして、どうやら、その命じられた食ひものを、まあ、買ひ調へることが出来るのです。謂はば、私はあの方の奇蹟の手伝ひを、危い手品の助手を、これまで幾度となく勤めて来たのだ。

ここに描かれているのは、まるで毎日の苦しい生活を支える妻となら考慮せずに自分がやりたいことをやっている夫との対比を示しているかのような一節である。言つてみれば、愛する夫に尽くす妻の役割をここではユダが演じているのである。

このような「あの人」の在り方を前掲の渡部芳紀氏は

「『駄込み訴へ』論」において次のように解説している。

・キリストの〈美しさ〉は、〈精神家〉の美しさであり、理想主義者の美しさである。キリストは〈子供〉のやうに慾が無く、ユダが差し出した〈広い桃畠〉を持つた〈小さい家〉で〈よい奥さま〉と〈一生、安樂に〉暮らすという、つつまじやかな幸福をも拒否するのである。キリストにとつては生活上の幸福、外面の幸福はとるに足らぬものである。そうした幸福を求めあまり〈外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢とに満ちてしまつたパリサイ人のやうな人間になつてしまふことを拒むのである〉。(四)

確かにそのとおりであろう。しかし、果たして「駄込み訴へ」の「あの人」はキリスト(救世主)なのであるうか。

つまりここで問題としたいのは、福音書に登場する「イエス・キリスト」ではなく、太宰の作品に登場する「あの人」である。私たちはユダの眼を通して「あの人」を観ている。その視線の幅の中に捉えられる「あの人」は現実的な条件を無視し、ただ空想的なことばかりを口にしてゐる人物ではないのか。

太宰の作品にはいわば「神の御子」の系譜といふべき人物が数多く登場する。この「神の御子」は最晩年の『人間失格』の大庭葉蔵となつて明瞭な姿を地表に現す。葉蔵が

「生活といふものがわからない」という時には、実は現実を成立させている形而下的な条件を欠落させているという設定を示していることに他ならない。言うならば、葉蔵の「手記」とは、「駄込み訴へ」の「あの人」側からの内面告白なのであり、この「あの人」とは現実の生活に触れない所に存在する『ロマンチズム』の喩として登場して来ていると言えよう。

七、日本化された風景

ところで、この作品にはもう一つ妙に感じられる雰囲気がある。それは、どこか日本の古い昔の、例えば奉行所での出来事のように思われることである。それは一体どこからやつてくるのだろうか。

「一、はじめに」にあげたように、そもそもの「駄込み訴へ」という題名からして、江戸時代の法制用語であり、正規の手続きを経ずになされる緊急の「訴え」を意味していた語であつた。それをここに取り込んだのだが、この位置づけは全編に互つてゐるようである。訴える相手を「旦那さま」といい、その場所を「役所」といい、さらには「下役」という言い方も使つてゐる。

・あの人と弟子たちとだけ居るところを見つけて役所に知らせてくれた者には銀三十を与へるといふことをも、

耳にしました。

・ほかの人の手で、下役^{しやくやく}たちに引き渡すよりは、私が、それを為さう。

「役所」は近代以前から既に使用されていた語である。例えば、黄表紙の恋川春町画作「高漫斎行脚日記」²²には、

・たび／＼三人の者へ金催促すれどもかへさざるゆへ、青砥左衛門のやく所へうつたへいでける。青砥左衛門藤綱訴へき、とりはからう。(下)

として出て来ている。このように考えると、「下役」は下級の役人でいいとは思われるが、かつては町々に雑務や夜番などを勤めた「下役」という人間がいた。そのようなニユアンスをも感じさせる前近代の語である。

また、ユダがイエスと「春の海辺」で二人きりで親しく話す場面において、

・私の村には、まだ私の小さい家が残つて在ります。年老いた父も母も居ります。ずいぶん広い桃畠もあります。春、いまごろは、桃の花が咲いて見事であります。一生、安楽にお暮しできます。私がいつでもお傍について、御奉公申し上げたく思ひます。

「駄込み訴へ」の中で数少ない風景の描写である。「春の海辺」といい、『新約聖書』には当然ない「桃の花」のイメージといい、どこか日本のかつてのびやかな農村の雰

囲気が匂い立つてくる一節であり、「御奉公」などもその雰囲気作りに一役買っているはずである。

さらに聖書における「過越の祭(除酵祭)」は重要な意味を持つていたはずであるにもかかわらず、ここでは単に

・いよいよ、お祭りの当日になりました。
と何か村祭りの日でもあるかのように、聖書の意味の磁場を消してしまっている。

以上の諸点を最も端的に示しているのは、再録本の装訂である。これは「昭和十七年一月一日刊行 月曜荘私版」として出されたものである。和綴を施し、それを和紙を貼った帙に収め、その帙には題簽まで付してある。その題簽には、作品名とその下の作者名を毛筆で入れ、また、奥付の刊記も作品名「駄込み訴へ」だけは別として、それ以外は全て漢字表記されている。つまりあたかも江戸時代の版本を思わせるかのような装訂の仕方を取っているのである。おそらく、こうした外形がこの作品にはふさわしかったのではなからうか。

八、おわりに

ではこうした日本化はなぜ必要だったのでしょうか。太宰の描く聖書物語は、ことごとく日本という風土の中における物語であつたように思われる。無論、それは太宰の理

解した聖書物語であり、イエス像であった。太宰によれば、ユダがなぜイエスを売るに至ったかは、『火』と『水』の相性の悪さゆえであり、『ロマンチズム』と『リアリズム』はやはり、解け合うことがないのではないか、という疑いであった。

「神の御子」イエスは太宰にあつては、いつも現実における実益的な才能に乏しく、夢ばかりを追う『ロマンチスト』として登場する。しかし、実はこの『ロマンチスト』の具体的生活を支えているのは、他ならず、ユダのような『リアリスト』である。この両者の関係を『芸術家』と『後援者（パトロン）』と取つてもいいし、先に述べた『妻』と『夫』という関係にアナロジーさせてもよいだろう。いずれにしてもその『ドラマ』は、明瞭な顔立ちをした土着的な日本の風土の上で展開している。

しかし、この太宰の場合は、たとえ日本化していくとはいえ、王朝の美学へとは向わない。むしろ、土臭い日本の農村の方へ寄り添っているように思われる。そのような意味において、この作品はすぐれて日本的な『ドラマ』⁽²⁾なのである。

(注)

- (1) 『金沢大学国語国文』二三号（一九九八（平一〇）・三）その後、一九九八（平一〇）・五『太宰文学の研究』東京堂に所収
- (2) 山内祥史『『駆込み訴へ』の書誌』（一九七〇（昭四五）・六『解釈』教育出版センター）その後、一九七三（昭四八）・三解釈学会編『太宰治の文学』教育出版センターに再録
- (3) 木村小夜『駆込み訴へ』の項（一九九五（平七）・一一）神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』勉誠社がまた別の視点から先行研究をまとめている。
- (4) 林房雄『新人の世界——文芸時評』（一九四〇（昭一五）・三『文学界』）但し引用は、一九九二（平四）・一〇山内祥史編『太宰治論集 同時代篇』1 ゆまに書房による
- (5) 渡部芳紀『『駆込み訴へ』論』（一九七六（昭五一）・九『作品論太宰治』双文社）
- (6) 田中良彦『太宰治と『聖書知識』（一九九四（平六）・四朝文社）
- (7) 菊田義孝『ユダの心——『駆込み訴へ』と山岸外史著『人間キリスト記』（一九七六（昭五一）・五『国文学』二一巻六号學燈社）
- (8) 山田晃『論語・聖書・愛——『駆込み訴へ』雑記——』（一九八三（昭五八）・三『二冊の講座太宰治』有精堂）
- (9) 山口浩行『『駆込み訴へ』試論』（一九九一（平三）・一一『稿本近代文学』一六号）
- (10) 玉置邦雄『『駆込み訴へ』の世界——イエスの逆説的な愛の証し』（一九七八（昭五三）・一〇『現代日本文芸の成立と展開』桜楓社）初出一九七四（昭四九）・一〇『日本文芸学』九号）
- (11) 磯貝英夫『饒舌——両極思考——『駆込み訴へ』を視座とし

て——(一九七九〔昭五四〕・七『国文学』二四卷九号 學燈社)

(12) 高橋英夫「ユダ的テーマの系譜」(一九八二〔昭五七〕・五『国文学』二七卷七号 學燈社)

(13) 奥野政元「『駆込み訴へ』ノート」(一九九二〔平四〕・九『活水日文』二五号)

(14) 佐藤泰正「『駆込み訴へ』と『西方の人』」(一九八三〔昭五八〕・六『解釈と鑑賞』四八巻九号 至文堂)

(15) 高橋清隆「太宰治『駆込み訴へ』と聖書」(一九八六〔昭六一〕・九『静岡近代文学』一)

(16) 「裏切り」という事態に関して、饗庭孝男氏は『鑑賞日本現代文学二』太宰治(一九八一〔昭五六〕・二 角川書店)の「駆込み訴へ」の節で、

・裏切りの歴史的な重みを永遠に背負ったユダは、マルクス主義運動からの脱落を感性的にせよ強くうけとめていた太宰の「裏切り」の意識に何ほどの意味を持っていたことを見逃してはなるまい。

・愛と憎しみにきかれ、裏切りに走ったユダに対する太宰の造形は、つねに「求愛」という形で世間にむき合うとともに、裏切りの悔恨によって過去の体験をかけたところから発したものと、そこに現実的な体験を読み込んでいるのである。

「駆込み訴へ」ノート」は「裏切り者」というターム自体が成立するものなのかどうか、とその前提の所において大きな疑問を投げかけている。

(17) 「シモンやペテロは漁人だ」というこの一節に関して、『ペテロやシモン』の「や」は間違いではなからうか?と後藤明生

氏は「『駆込み訴へ』の謎」(一九九二〔平四〕・八『文学界』四六巻八号)の中で指摘している。初出誌以来こは「や」であるが、私においても、以前から気になっていた箇所である。考えらる可能性として、1「太宰の間違い」説。2「熱心党のシモンとペテロの二人」説。3「特殊な当時の解釈」説。4「あえて行った作者の意図」説。これには、①「同一人物の二元化を図る」。②「アンデレ」ではその喚起力が弱いので「アンデレ」の替わりに「ペテロ」と「シモン」にした、の二通りがある。以上、四つの可能性が生まれる。おそらく、最初の「太宰の間違い」説は稚拙でありすぎてあまりにも不自然である。また、次の「熱心党のシモン」は「漁人」とは言えず、さほど意味のある改変とも思われない。また三つ目の「特殊な当時の解釈」説は、可能性としてのみ存在はするかもしれないが、しかし、どうであろうか。残るは四つ目の意図的な改変である。①、②のいずれかのように思われるのだが。

(18) 細谷博氏の『太宰治』(一九九八〔平一〇〕・五 岩波書店 岩波新書 新赤版五六〇)は「第4章 動く『私』」で、「語り口」という点においてであるが、「燈籠」との関連性に触れている。

(19) 漱石の『こゝろ』において、先生とKが房総半島を旅行した際に、Kの言う「精神的に向上心の無いものは馬鹿だ」(下・三十)を思わせる一節である。

(20) 人称から分析した先行研究としては野松循子氏の「文体・表現から見た『駆込み訴へ』」(一九九三〔平五〕・四『新編太宰治研究叢書』二 所収)がある。

(21) イエスの「意地悪さ」は本文中に次のように頻出している。
・それほど意地悪くこき使はれて来たことか。

・私を意地悪く軽蔑するのだ。

・私に意地悪くしむけるのです。

・あんなに意地悪く軽蔑するのでせう。

・あの人の今更ながらの意地悪さを憎んだ。

(22) 引用は、『日本古典文学大系』五九(一九五八〔昭三三〕・一

○ 岩波書店)による。話の筋は、鎌倉最明寺殿の御代に俳諧の師範である高漫斎万屋が「俳諧修行」に出た留守中、高弟の法外が門人にでたらめを教え、遊芸や廓がよいにうつつを抜き、門人三人が金貸しに借りるが返せずに、訴えられる。後、高漫斎万屋が帰り、彼らに憑いた天狗を退治するというものである。なお、この箇所が登場している、青砥左衛門は、当時の引付衆の一人であり、訴訟に公平にあたり、信望が厚く、太宰の『新釈諸国噺』の「裸川」の主人公でもある。

(23) 「義務」(昭一五・四「文学者」)では、「先月、私の書いた『駄込み訴へ』は、ドラマである。声を出して読むと、よくわかるのである。おひまの人は、いちど、声を出して読んでみて下さい。そのやうにして書いたのである。」と言っている。なお、この作品が口述筆記によってなされたという点に関しては、美知子夫人の「御崎町から三鷹へ」(八雲版『太宰治全集』月報第四号)、同「増補改訂版回想の太宰治」(一九九七〔平九〕・八人文書院)「I三鷹」に詳しい。ただし、この「口述筆記」という在り方をめぐっては野原一夫氏の「太宰治の口述筆記」(一九九八〔平一〇〕・七『日本近代文学館』第一六四号 日本近代文学館)が、「おそらく太宰は、『完成稿』とそれほど違わぬ草稿をすでに書き上げ、頭の中にインプリントし、それを咀嚼しつつ、口述したのではあるまいか。」と推測している。